

103 骨盤内臓器の子宮腫瘍に対する各ボデーイメージングの臨床的評価：特にCTとRIの比較

都養育院付属病院、核放

○戸張千年、飯尾正宏、樋口竜夫、山田英夫、
千葉一夫、村田 啓、川田新一郎

東邦大学、放

黒沢 洋、室井克夫、大村 剛、野口昭二

(目的) 骨盤内臓器特に子宮腫瘍のイメージング法は近年高速の body scan CTの開発、RI 機器・医薬品及び超音波等の進歩により、より詳細に確認出来るようになった。更に骨盤の内部構造と週辺臓器との関係も判別出来るようになった。今回、われわれは子宮腫瘍の各イメージング画像診断の有用性について比較検討を行ったので報告する。

(方法) 対象患者は都養育病院と東邦大学に於ける子宮腫瘍例である。装置は、CTにはGE社のCT/Tを用い、造影法はConlay 3 ml/kg-body weightを用い適時使用した。スキャンは会陰部より上方へ2 cm毎に撮像した。²⁰¹Tl CT子宮腫瘍スキャンはpho/Gamma HPを用い、²⁰¹Tl 2mCi 静注2時間にボラロイド画像とした。そして全例RI法とCT法で比較検討を行った。血管造影は骨盤内血管造影をセルジンガー法にて行った。また超音波診断にはアロカSSD-60Cを用い、矢状面断層を撮像した。

(結果) 各種 body imagingの比較を行った。CT scanで子宮組織は骨盤内下位に位置し、比較的均等な充実像が得られ、特にenhancementによりよく増強される組織であり週辺臓器との鑑別が出来た。子宮腫瘍の質的診断、たとえば良性腫瘍と悪性腫瘍の鑑別が出来た。enhancement後、前者は均等の個々の増強像として得られるが、後者は不均等像と同時に病期の悪性増加に従い腔内の炎症性形態が認められ明らかに判別可能であった。また腎尿路系の拡大やウツ滞等の像も十分に撮像され臨床に非常に有効であった。RIスキャンは²⁰¹Tlの子宮腫瘍スキャンと週辺臓器特に腎尿路系スキャンを行った。²⁰¹Tl子宮腫瘍スキャンは未だ理論的確立が不明であるが、ある程度以上に発育した例ではexternal scanningにより描出可能であった。また腎尿路系スキャン、(腎スキャン並にレノグラム)は週辺臓器の機能面を推測するに非常に有効であった。

(結論) 子宮腫瘍例に於ける各種 body imagingの比較を行うと、1) CT法は優れた解剖学的所見が得られる。2) このように優れたCT法の応用可能となった現在でもRI法にはScreening法として、また週辺臓器との比較の点で有用性があった。3) また従来のPAG法はCTscanほど解剖学的変化は得られないが、腫瘍の鑑別にはやはり否定出来ない/補助診断であった。4) 超音波法は上記3方法の被曝線量がない点でより都合がよいが、詳細な解剖学的並に器質診断には限界が有るようである。

CT法、RI法、超音波法及びangio法を主として子宮腫瘍に応用し、各々の診断、治療及び手術法の決定に価値ある結果を得、それぞれの特性について報告する。